

米国

金融政策動向 (2021年9月 FOMC)

テーパリング決定は次回に持ち越し、22年利上げ予想は二分

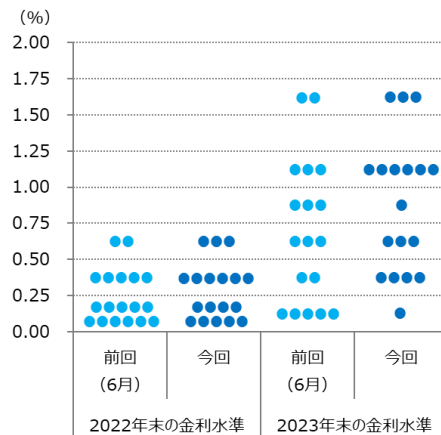
政策・経済センター
田中高大
03-6858-2717

1 FOMC参加者の経済見通し

		前回 (6月)	今回
GDP成長率 (%)	21年	7.0	5.9
	22年	3.3	3.8
	23年	2.4	2.5
コアインフレ率 (%)	21年	3.0	3.7
	22年	2.1	2.3
	23年	2.1	2.2
失業率 (%)	21年	4.5	4.8
	22年	3.8	3.8
	23年	3.5	3.5

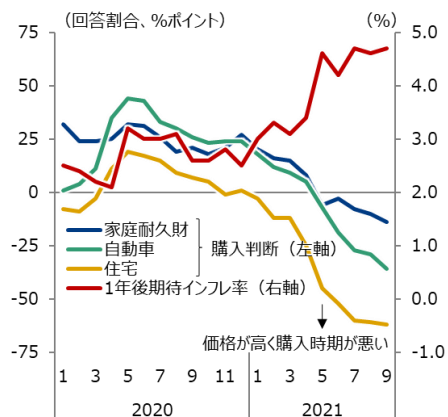
注：FOMC参加者の中央値。各委員の予測の集約であり、FRB公式としての予測ではない。出所：FRB

2 FOMC参加者の政策金利見通し



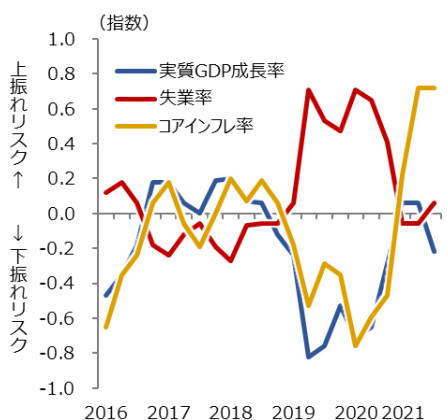
注：ドットは当該水準が政策金利のターゲットとして適切であると考えられるFOMC参加者の人数を示す。出所：FRB

3 インフレの消費マインドへの影響



注：購入判断は、各財について「価格が安く購入時期が良い」から「価格が高く購入時期が悪い」を引いた値。出所：ミシガン大学より三菱総合研究所作成

4 FOMC参加者の見通しへのリスク認識



注：各指標の予測に関して、「『上振れリスクに加重』と回答した人数-『下振れリスクに加重』と回答した人数」を総参加者数で除した値。20年3月はデータなし。出所：FRB

評価ポイント

決定事項・経済見通し

- 9月21-22日に実施された連邦公開市場委員会（以下、FOMC）の結果、連邦準備制度理事会（以下、FRB）は、資産購入を現行ペースで継続すること、政策金利の誘導目標を0.00-0.25%に据え置くことを全会一致で決定した。
- 声明文やパウエル議長の記者会見では、物価・雇用の回復が堅調に進めば、早ければ11月のFOMCでテーパリング開始が決定することを明言、テーパリングは「22年中盤に終了するペースで」とした。
- FOMC参加者の見通しでは（図表1）、供給制約やデルタ株の拡大により、21年のGDP成長率が+5.9%と、前回（6月）の+7.0%から下方修正された。また、21年のコアインフレ率は+3.7%と、前回+3.0%から引き上げられたが、22年以降は2%強に落ち着くとの見方は崩していない。
- 政策金利見通しでは22年及び23年の利上げを見込む参加者数が増加、22年中の利上げを見込む参加者が半数となった（図表2）。

今後の注目点

- ジャクソンホール会議後初となる今回のFOMCでは、間もなくテーパリング開始が決定されることを改めて明言した。デルタ株の拡大で8月の雇用回復が低調だったため、今回でのテーパリング決定は見送られたものの、労働需要は依然強いことから、次回11月のFOMCで決定される見込みだ。
- 今回の経済見通しではGDP成長率が下方修正、インフレ率は上方修正され、経済停滞と高インフレが同時進行するスタグフレーションを懸念する声もある。
- FRBはインフレについてハト派的なメッセージを続けているが、家計の期待インフレ率は高止まりしており、消費者マインドにも悪影響を与えている（図表3）。FOMC参加者もインフレリスクを認識しており（図表4）、インフレへの警戒が22年の利上げ予想人数が増加した背景にあるとみられる。22年中の利上げ予想は二分されているが、インフレ抑制へと舵をきるかどうか注目される。